

イサムはエメラルド色のバスで……

秋野亥左牟の切符・果てしない旅のはじまり



高橋秀夫 (随筆家)

野火の煙が平たい田んぼにふたつみつと上っていた。

稲刈りが済んだ田んぼには馬のようにみえる稲積が雲みtainな野火の煙の中でざらりと時おり光っている。

ガタン、シューウとその煙か霧の中にエメラルド色のバスが止まった。

あたりはさらに白いけむりか霧がぼーと広がっている。

すると、どこから現れたのか背の高い、長髪の男が吸い込まれるようにそのバスに消えた。

しばらく、煌々とまぶしいほどの光の帯が虹のように広がり、あたりは輝いていた。エメラルド色のバスはやわらかい生き物のように男を迎え入れた。

やがて、ヒューと発車の合図がしたかと思うとそのまま宙に浮き上がった。

そして、ガタン、シューウと白い霧をかき消すようにエメラルド色のバスは動き始めた。

僕は前にいた女に尋ねた。

「あれは誰だい」

女は振り返りもしないでこうつぶやいた。

「イサムだよ。秋野イサム。また、出かけちゃったよ。」

と、女はにこりとしながら振り向いた。

すると、バスも霧もすつと消えて、また、稲積と野火の田んぼが女の後ろに広がっていた。

2011年11月23日秋野亥左牟76歳の旅だち。

秋野亥左牟は絵描き。10年単位で一冊の絵本を描く何とも希有な男であった。何故そんなに時間をかけるのか、不思議であった。彼と初めて会ったのはいまから20年ほど前である。沖繩の小浜島から広島に移ってきた時で、仲間うちではよく知られていてインド、カナダと16年も旅してきた男である。

この時、一冊の絵本にそれだけ時間をかけるのがわかった。彼の旅はちよつとした旅行とは全く違う。

その場所に住んでしまうのだ。3年、4年とそこでその地に暮らし、絵を描く。だから、時間がかかるのである。

彼の行き先は近代都市ではない、アニメジムの精神文化を今でもこころの糧にして暮す地にその足は向かう。そこで、彼が気づくことはわたし達の現在の生活の様がいかに人間の都合で築かれたことであるという、その歴史である。かれの残した旅の絵巻にはおびただしい人間のエゴとそれに抵抗しながら自然の一部であるときままえてくらす美しい大地と生き物が相関図のように描かれている。彼はその地でじつと自分のありようを探し、失くした尊い生活文化を見つめ苦悩した図でもある。この彼イサムの旅と彼、イサムの残した絵は貴重なもうひとつの歴史書である。

残念なのは彼の故郷である「ニッポン」が描かれず仕舞いであったことだ。

また、以前出版され絶版になっていた「イサム・オン・ザ・ロード」が再編集されてこの春、梨の木舎から新たに出版されます。

イサムの貴重な自叙伝でもある「イサム・オンザ・ロード」が多くの方々に読まれることは実にうれしいことである。

さらに、この春(4月3日〜4月8日)京都の堺町画廊で秋野亥左牟生誕を記念して「イサムオンザロード」おれはここを歩く」の催しが予定されています。(くわしくは別記)

秋野亥左牟をあの世から呼び、歌を、笛を鳴らし酒を飲みましょうか。

僕は女に促されて石畳の道を登った。

古い農家が現れた。彼の家である。

長い時間たらずむ家の中に岩絵の具の鮮やかな赤や緑が目飛び込んできた。

振り向くとガラス戸にエメラルド色のバスが稲積の向こうに消えていった。

「イサム～オン・ザ・ロード おれはここを歩く」

イサムさんと縁のあった多種多様な人間がイサムさんを肴にして集まろうじゃないか、イサムさんの絵や作品を見ながら思い出をシェアし、これをきっかけに繋がりを深めていこうじゃないかということで、毎年個展を開いてきた京都・堺町画廊にてイベントを催します。イサムさんの絵などを展示するほか、毎日ライブ演奏、絵本の朗読等を行う予定です。(ライブは投げ銭カンパ)

★期間：4月3日(火)～8日(日)

★会場：京都・堺町画廊＝中京区堺町通御池下ル

Tel/Fax. 075-213-3636